

創刊号

四月二十日発行

東大學生 獄中書簡集

体制はゴジされたぞ

朕（加藤）はたらふく食つてゐるぞ
匪賊共鬪ムシヨで死ね

ギヨメイギヨジ

「獄中書簡」発刊委員会より訴える

△長期公判斗争を全社会的に斗い抜くために▽

諸君があの拘留理由開示公判を傍聴したなら、次のことを承認されるだろう。不条理な、あまりに不条理な裁判制度、しかもそれを大のふこなが、白昼公然と理性の名において行なつていることの不気味なほどのこつけいさ、この一連の悪ふざけの中で「被告人」のみが人間の顔をしていること。

諸君がかつて一度でも「拘置所」で「接見」したことがあるなら、次のことに気付かれるだろう。類人猿どもが人間を檻の中で飼育しているといき気が汪々こうな事実、そして、人間を人間から切り離すことが拷問として行なわれていること。

以上の事実を全社会的に暴露することは、公判斗争の重要な戦略のひとつである。そしてこの戦略はもうひとつ重要な戦略を必然ならしめる。つまり、獄中の人間と婆波の人間との間に、人間的な連帯を全社会的に作りあげること、これを媒介にして獄中の人間相互の間の人間的なコミュニケーションを回復することである。

△何故「獄中書簡」をか？▽

権力の厚い壁を越えて、「人間」の生々しい情念を我々に伝える手段はこれしかないのだ。したがつて、獄中の人間と婆波の人間との間に人間的な連帯を全社会的に作りあげ、さらにこれを媒介にして獄中の人間相互の間に人間的なコミュニケーションを回復するためには、「これ」を使う以外に道はない。

目

一、四月八日小菅より……………鈴木
二、四月八日東拘より……………武司
三、四月三日東拘より……………水嶋
四、四月十日中野より……………尾崎

次

琢郎（仮名）……………1頁
司……………5頁
号……………5頁
昭……………8頁

木上

猛司

文昭

琢郎（仮名）……………1頁
司……………5頁
号……………5頁

四月八日小菅より

鈴木琢磨（仮名）

加藤さん、元気ですか、外の情勢はとても厳しいようですね。

今、僕らは、何が起つたのか、を真剣に総括しなければならない時期に入つたと思います。この間、駒場でのラジオのインタビューを聞きました、その中で「一般学生」とおぼしき学生が、共斗会議の学生に向つて、「君達は負けたんだ」と叫んでいました。僕は思わず、このコツケイな逆立ちを笑いました。負けたのは革命ではない。自分が大学へ入ることによつて確保した彼のチツボケな私有財産の秩序を越えることのできなかつた人達、彼らの描く理想や観念や計画が、この斗争の中で眞に負けたのです。歴史は、そう総括されなくちやなりません。

小学校2年までの僕は、ゲーテの詩にあるような「反抗的で御し難い」生き生きていた少年でした。日曜ごとに山や野をかげめぐり、身体のあつちこつちに傷を絶間なくつけていました。先生は猛烈に怒つて舌打ちをし、「あー、この舌打ち！ 僕はい

あつちこつちで周囲にぶつかりながら、僕はよく自分を主張しました。世界は僕のものでした。僕は毎日毎日大いなるOCTOをプレゼントしました。家は豊かではなかつたけれど僕は欠陥を感じることはなかつた。僕がすねると本が与えられた。本は僕に魔術的な作用をした。どんなに面白いいたずらも、どんなかんしゃくも、本が与えられるとやむのだつた。（今では本が与えられただけでは、絶対におとなしくなりはしない）動くおもちゃは、僕の探求心をかきたて、「分解ちたの」の声ですぐ駄目になる運命にあつたけれど、それでも根気よく与えられた。僕の生活はすばらしかつた。僕はすばらしい少年だつた。

しかし、この社会は、そうした自由奔放な生活をいつまでも許はしなかつた。この社会に適合することを強制する学校の教育は、僕を少しずつ変えていつた。その象徴的で決定的な事件は小学校2年の時起つた。国語の時間だつた。先生は黒板に「いちのかわ、にのかわ、さんのかわ」と書いた。僕は威勢よく手をあげて「先生は漢字を知らないんですか？」と叫んだ。

（までも夜中に誰かが舌打ちをした時などは背中に悪寒が走る）
僕を立たせて、梅干しと称する刑罰を僕に課した。若い先生だ
つたので多分侮辱されたと思つたんでしよう。盛んに「出かける
ふりをするな」と言つてたのを思い出しますから。

この事件は決定的な作用を僕に与えた。それまでの即的な
調和の世界、明朗なギリシャ的世界は粉碎された。他者が暴力
的に僕の中に侵入してきた。世界がとげとげしいよそよそしい
ものになつた。僕は僕の中から出て行くのをやめようと決心し
た。僕は自分を表現してそれを自分に確保すること。自分自身
になることの努力を放棄しようと決心した。それは危険なこと
だと思われたから、（あの体験は僕を深く傷つけた。）僕は自
分を一般化しようと努めた。僕は自分を周囲の他者と等質で均
質なものにしようと努めた。それが教師の要請をもつた。僕は
「模範生」を演技した。小学校3年の通信簿は2年の時と对照
的に、僕を「模範生」であり、「鏡」とあると賛えていた。僕
は自分の演技の成功を皮肉な笑みで迎えた。「模範生」とい、
「鏡」というも、それはまるで貨幣のようなものです。それ自
身の使用価値、有用性、個性などは問題にならない。ただただ
他者の価値を映す一般的な等価形態なのです。それはブルジョ
ワ社会で最も典型的に疎外された人間という以上の意味を持た
ない。そうしたがんじがらめの束縛の中で、僕の感性は成長を
やめだように見えた。他者との相対をやめようとした限りにお
いて「模範生」を演技しようとしたりおいて、僕は自分を失
い、自分の中に他者が無制限に侵入してくるのを見た。その

うち、僕は自分で自分を操つてゐると思つていたのに、何か他の
ものに操つられている感じがしてきました。僕自身はどこかへ拡
散してしまつた。（こうなるのが必然的であつたのか、単にミ
イラ捕りがミイラになつてしまつたのかは解らないけれど、そ
の後の過程をみると、そうなるのがどうも必然だつたらしい。）

今僕は本当の僕ではないという意識は、その後ずっと。時
には頭在的に。通常は潜在的に僕を捉え続けた。僕は高校一年
の時、日記にこう書きつけている。「今日は記念すべき日です。
僕が僕自身になつた日です。」と、今から考へると、それは正
確な表現ではなかつた。僕が僕自身になろうとした日です、と
いうのが正確な表現だと思う。（僕は後になつて、その作業が、
その時思つていたほど簡単なものではなく、一個の世界史的な
作業であることを認識することになる。）僕は自分を拡散させ
てしまつた過去の生をのろいながら、その作業に着手したが、
それは大変な仕事だつた。僕はガリ勉組を軽蔑しながら、卓球
部へ入つてキヤブテンをやり、懸命に本を読んだが、何らの成
果らしい成果はなかつた。キルケゴー尔やニーチエの助けを借
りて、若干主観性の深みに足を入れてみたけれど、そこに解決
があるとは思われなかつた。僕は僕から豊かな活動を奪う受験
勉強を拒否した。しかし、半ばひきずられた。その当時の僕の
自己意識は、「すべてが空しい」ということだつた。僕は擬似
的生に「空しい」という言葉を投げつけたのだが、しかしそれ
ならばどうするのか、ということについては、解答がなかつた。
だから、二重に「空しい」わけであり、「すべてが空しい」と

いうことになるわけです。当時僕がやったことは擬似的生をして、徹底的に擬似的生たらしめる、ということだつた。それで、僕は太宰グループの仲間と、バチンコ屋なんぞをうすう歩いたのです。それで、今の高校生の諸君が、「人生なんて空しいのに、その上空しい卒業式をやるのは嫌だ」と叫んで角材で卒業式粉碎をやるのをみていると、涙の出るような共感をおぼえ、彼らには、そういう運動があるだけまだ幸せだと思つたりするのです。

僕はウエーバーやマルクスを読んでいにけど、「團結とは、労働者が生き生きとした個人として、ふらまう方策である。」つまり、斗争の中で作られる團結の中でにけ、自主的にふるまえるのだ、というマルクスの言葉を理解する現実的な基盤を欠いていたので、あの「空しさ」を解消する方向が、当時の僕らには見えなかつたのです。（中略）僕は絶対的に組織者ではなくかつた過去の僕の生が、丸山真男のそれを人して越えるものではないことを理解した。丸山を理論的に批判する、という作業の中での「空しさ」が解消してしまうと考えるのは無邪気な自己偽瞞にすぎないことがはつきりした。意識の上での左翼性など、問題ではないこと、その人が何を言うかでなく、何をするかによつてその人を判断しなければならぬ、とするマルクスの言葉を僕は思い出すことになつた。捕つてこにへつて、丸山真男流の、分業を、従つて結局は、私的所有を前提にした而非普遍性、幻想的な普遍性の世界が、音をたてて崩れた後、僕は、それまでの僕を間歇的に襲つていた、あの「空しさ」の

世界をもつとはつきり対象化できるようになつたのです。その吐き氣のするような震えるような陰鬱な世界こそ、眞に根底的に疎外された人々、労働者大衆の世界なのだ。「もてる」人達には、幻想がじやまをして、はつきりと見えることのできない世界なのだ。それは、死の世界であり、無の世界です。

「戦いか死か。血みどろの戦いか、無か。」といふのは、決してカツコいいアジテーションではないのです。僕は自分が弱いことをよく知っています。聖者意識や、英雄意識は、僕と全く無縁です。僕の性格を、犬の如く嗅ぎわけた検事、警察のやり口で、僕は既に一敗している。「名前も事実も言わないのでもう君だけだ。（これはかなり真実だつた、後でわかつたことだけど、僕を含めてその時の完黙は、二十四余名中、五、六名だつた。少年が多かつたせいもある。）その場合は保釈しないよ、この裁判は長くかかるよ、八年位かかるかもしない。君の青春はめちやめらやじやないか」という検事の言葉はかなりリアルに響いた。その時僕は勘えただけど、その翌日、僕が知つていた完黙の人が起訴された。まだ幻想をもつていた僕は動搖した。かなりの人が事実まで喋つていてることが、少しづつ伝わつてきた。皆は次々と調べられるのに、僕だけ調べがない。その日から、五、六日、僕は調べもなく放つておかれた。僕だけ、僕は気が狂いそうだつた。あと三日で勾留が切れるという時、検事調べがあつた。企まれたものとすれば、僕の性格を見透した見事な演出だつた。僕はできる限りトウカイしたけれど敗北したことはもう確かだつた。僕は分離裁判に応ずる積りは初め

からなかつたけれど、「もし加藤さんが、あの「空しさ」の世界の対象化を援助してくれなかつたら、僕の苦痛は激烈に長く続いたことだろう。今はもう僕は強くなりました。あのラディカルな世界を根底的に理解しましたから、それで今ではどうなつても平氣だと言えるのです。現在を生きていない人間は、いつも未来を食べている。現在を生きている人間には、そういう意味での未来は必要ではないようです。僕は永遠に、現在を生き続けます。

僕らは未来に光をみたから立ち上がりつたわけではない。未来に光があることなど誰も保障しない。僕らは現在が陰鬱で空しい暗闇だつたから、斗いの火を掲げたのだ。展望など僕らが創るものとして以外は存在のしようがない。そうでなければ幻想だろう。僕らは、自分が生き生きとできない理由を科学的に認識し、それを一步突破することによつて、一步火を前進させることができた。斗わずに前進させることなどありえない。敵は巨大である。斗えば斗うほど、敵は巨大に見え、実際巨大になつていく。けれども斗う以外に僕らが生きる道がないならば、僕らは、それを越えて、より巨大になつていかなくちやならない。僕ら一人一人が、世界をこの手に握ることができるほど、豊かで巨大な人間になつていかなくちやならない。そういう認識の中から偽瞞でない楽天主義が生れてくる。民主連合政府ができるかもしれない。しかしそんなことはどうでもいいことだ。僕らは、斗いを通して分業を廃棄しうる労働的な團結を全世界に向つて永続的に拡大させていくことを追求する。そ

れは、僕らを、生き生きとさせない最終的な原因が分業にあることを、僕らが確信するからである。分業は私的所有の根源であり、私的所有は資本制的私的所有の根源である。分業は人間と人間を対立させ、競争させ、互いに互いを手段化させ、「万人の万人に対する斗争状態を作り出し、あらゆるもの商品化させ、逆立ちさせ、人間関係を物化させる。僕らはその中で、自分を失い世界を失う、あらゆるもののがリアリティを失う。(前の僕には、精神労働者としてでも、生き生きと生きられるという幻想があつて、そのために、世界が崩壊するところまでいかなくて、「空しい」という実感にとどまつていた。そういう幻想の幻想性がはつきりした、という段階で世界の崩壊が僕に起るようになつたのだ、と思う。)

ここで、「楽天主義」、「確信」というのは、単なる即目的な思想や感情ではなくて、とても、矛盾に満ちたものです。楽天主義は僕の背中であり、その腹はニヒリズムです。だから、樂天主義は科学的認識に基づくものではあつても、それと同じではありません。「よし、それならもう一度」というニーチェ的な、居直りに近いものです。それ故、それは苦渋に満ちた樂天主義なのです。それがある限り、僕は自殺したり、発狂したりはしません。「確信」もまた矛盾した構造をもつています。確信がある故に斗うのでないことは前に書きました。むしろ斗争を引き出すのです。それがある程度、僕は自殺したり、発狂したりはしません。

「確信」もまた矛盾した構造をもつています。確信がある故に斗うのでないことは前に書きました。むしろ斗争を引き出すのです。四月、五月の段階で、斗争がこんなに大きくなるものとは、どんな優秀な活動家でも予想しなかつたと僕は確信しています。そういうことの中に、むしろ僕は、「確

信」を見つけます。（おつと、僕は二つの確信を混同した。）

「革案成立」を待たず粉碎し尽されると必至と確信します。

斗争→革命が起るであろうという確信は、今述べたような構造になっています。もう一つ、分業は廢棄しうるという確信の、物質的・客観的諸条件については、次号か、その次位で展開します。それに対応して人間が変わりうるか、という問題がある。それは誰にも何ともいえない。人間は果してそれをよくなし得るか？ ジヤン、ジヤン！ 答はNonでもQuiでもない。歴史は先驗的に書かれはしない。歴史は神祕ではない。歴史は人間がつくるものです。僕は、ただ生き生きと生きたいから、斗う。僕自身になりたいから斗う。僕の苦痛の根源が、分業にあることを解信するから、その苦痛を情勢に変えて、世界を改革する為に斗う。それが全てです。僕は結果的に自爆することになるかも知れない。しかしローザは自爆したのだろうか？ レーニンは自爆しなかつたのだろうか 答は Non でもあり Qui でもある。

四月八日 東拘より

武 猛 司

[1] 春の風が鉄格子付の独房にも流れ込み、外の春を感じさせる
　　昨今です。限られたニュース源しか持ち得ないので、情況の
　　把握等不十分ではあります、連日新聞紙上を埋めている「個
　　有の権利承認」から「学生参加」等々、資本家どもの叱咤勵
　　励にもかかわらず、そして媚のボーズよろしきにもかかわら
　　ず、表を新たにしたこのイデオロギー攻勢も、必らずや「改

[2] 救対ニュースを初めとする差入、ほんとうにありがとう。特に「進撃」を通じて知る東大全共闘のそして全国学園闘争の不屈な闘いは、何よりも僕を勇気づけます。勿論僕は統一公判勝利の日まで、一年でも二年でも闘い抜く決意です。先日東京地裁の分離公判決定を知り、弁護団の方に“ハンストも辞すべきではない”と僕の考えを表明したのですが、実際このように拘禁されて僕らが闘える形態は、ハンストしかまいかではないかと考えるのであります。 四月八日

水 上 26 号

ぜひ皆さんで読んで欲しい。加藤君あてになつてあるが、これを公開する位の勇気あつてこそ、彼の道が開けるというものだろうし、僕の現在位置に关心ある諸君に、それを知らせることにもなるので

草々

四月一日、加藤君の手紙と（K・T君の手紙）受取つて心楽しく読みました。どうもありがとうございます。手紙をもらつことがこんなにうれしいものだとすれば、君たちにしばらく無音を続けた僕の方こそ責められるべきですね。

「動を開始してしまひ、」とか、「ボク達の未来の幸福をもたらすか、永久革命者の悲哀」をもたらすか……とか。相變らずだな、とほほえましく思ひました。

今手もとにマルクスの「フランスにおける階級斗争」がありますので、その（12ページの）エンゲルスの序文からちよつと引用してみましょう。「当時（一八四八年）は、それぞの万病特効薬を説くあいまいな宗派的福音がたくさんあつたが、今日では一般に承認された、透徹明晰な斗争の究極目的をはつきりと定式化しているただ一つのマルクスの理論がある。当時は（地域と民族性によつて区別されていて）共通の苦しみの感情だけで結びついている。未発達な感激と絶望、あいだを途方にくれてさまよつてゐる大衆がいたが、今日ではやすみなく前進し、日ごとに数と組織と規律と洞察と勝利の確信を高めつづる。一つの社会主义者の大国际軍がある。」そして「いま彼らが一度の打撃でもつて勝利を獲得することは思ひもよらず、きびしいねばり強い闘争によつて一陣地より一陣地へと餘々に前进しなければならない」。…………

——現象にふりまわされではならないのです。我々の行動が、ブルジョア「國家」から「家族」に至るまでの一切のまやかしの共同体に亀裂をもたらすことによつて、眞の人間的社會（直接に社会化された自立した諸個人の結合）を獲得するものであるとすれば、それはまさに「きびしいねばり強い」闘争によつてのみ可能なのです。そして古い社会関係の結果である人物や幻想や觀念や計画やの一切をふりすてて進むわけです。「今や

闘争を続けるのみ」と言ひますが一方において、いろいろらしさのうちにかかえている旧社会・矛盾をこそあべき、それをすつさりさせる方向で運動にかかわるべきです。友人として卒直に貴兄にアドバイスをさせていただければ、徹底的に「運動体に内在する」べきです。いかにすばらしい内容をもつ歴史的解放闘争も、日常の些細な、むしろ一見煩雜で無意味ともおもわれるような事実より成り立つてゐるのです。地味な、脈々と統く日常活動があつてこそ、はじめて現象的にはなやかな闘争（註、固有名詞をもつた「事件」と云われるもの）があるのであります。右翼・民青・機動隊との対決は結果であつて、原因ではないのです。結果あるいは、政治的な現象としてのゲバルト闘争のみにかかわるのでなく、（黙々とでもよい）その運動隊の不可欠な根子、成員として、君が今まで「面倒だ」の一言ではねつけていたムスケルをきちんとやること。運動の本体はそちらにあるのです。君の言いそなことだが、「損な役まわり」などでは決してない。そもそも損とか得とかいうそれ自身商品であり類生活を個人生活の手段として、したがつて他の人間を自分の生活の手段におとしめるという關係に入ることによつてのみ生ずる感覺）を突破しなければならないのです。もしそういつたもの（自己執着）（労働者は個人的名声には無縁）、あるいはその変型としての自己顯示欲にとらわれていたままだとしたら、そういう人物はもはや運動によつて、ふりすてら

れ、打倒される以外の何物でもないのです。

なるほどたしかに、役割の分担は自然にできあがります。けれどそれ自体、旧い社会関係の結果である。(したがつて多くの偶然的要素をふくむ)種々の環境的決定要因や、又運動の中での熟達、努力等の産物であつて、だからどうすることもなく、何ら固定的なものなく、ただ相互に他を補ない合う共同作業として行われてのみ互いに意味をもつ、各個人の生命活動なのです。この商品、貨幣、資本が主体として君臨し、人間はその前にただ角皮化(物神)したけだものとして、ぎくしゃく生きているにすぎない(拝跪している)資本制社会を直接に社会化された人類の手に取り戻すこと、そうしたものとしての「解放」をかちとること、それを不斷に人間的な現在的な営為として突きだすこと。その戦線の一翼に加わること、それ自身「現実的な」大きな「よろこび」(幸福なのです。君が「未来の幸福」などというのは全くの「誤解」であり、君の立場の「中途半端さ」を端的に示すのです。我々の運動は、「現在」に対置して「未来」を対置するものではなく、「現在の苦しみ」に対して「約束された未来の千年王国」をかざして、「現在の苦しみ」を「苦しみ」として耐え、「未来の幸福」による「慰藉」によつてその埋め合せをしようなどと云うものでもなく、まして(かつての「折原論文」のでたらめさ!)「現実」に対して「理念」をかけるなどと云うものではないのです。我々の「人間のおたけび」はそれ自体「現実」なのです。「地上」の「争指令」などと称するものをみぐるしくまきちらしつつ、「将激突があるのであって、「地上」を「天国」からせめてくるの

ではないのです。「現実」の「社会関係」「生産関係」が「現実」のこの「豊かな感受性と情熱」をもつた「人間」にとつて全くの「桎梏」になり、それに適合せんとすれば、「人狼」と化し、あるいは「羊」と化すことによつて、つまり、自己と他の諸個人の「人間的本質力」を奇怪に変型させ、貶しめることがによつてしか、生きられないという「現実」やその「現実」に対する「現実」の「人間的生命活動」が我々の「闘争」です。したがつて、もし確かなもの(「喜び」)(「幸福」)をもとめるとしたら、そこ(闘い)の中にしか、ありえないわけだし、他處にある「確からしさ」などといふものは単なる妄想か、眞の対象ぬきの單なる享楽、したがつて眞の生命活動としての実質を欠く、単なる自己麻醉、人間的欲求のみせかけの「充足」にすぎないのである。(この点で石堂淑朗の「のみなスペシャルで始まる(ヨトルコ風呂のスペ)」といふチーゼの階級的(=小市民的)性格が明らかです。以上のべてきたところから小生が現在どれほど「現実」に運動に参加(↑ちよつと問題のある言葉ですが)しているかは読み取つていただけると思います。生きるとはこれ以外のことではないのです(小生にとつては)。非人間的な「生」を「生きる」ことは、それじたい「死」であり「無」であり、「血みどろの闘争」を「生き」そして「闘い」のうちに「死ぬ」ことこそ、まことの「生」なのです。なお、誤解しないでいただきたいのは、小生が俗悪にも「闘

「士官」なし「下士官」あるいはそれらの「候補」などといふ醜惡な意識で行動しているのではなく「前衛党を！」と叫び

ながら、自らも他をもひとつヒエラルキーのもとに統合し、「指導」と称する政治屋になろうとする「官僚集団」のもとに結集せんとする小市民的意識で行動しているわけでもないということです。（「指導」→「被指導」というダラクした関係）自傷行為の突破をこそ！）

ただまつたくの一志願兵、一民兵としてバリケードにかけつけ、獄内外の多くの諸君とともに、ブルジョア権力に非妥協的、永続的に対決しているということ、それ以上でも、それ以下でもない。

「スターリニズム」の眞の止揚が「階級形成」にあること、こと、「スターリニズム」を止揚したと称する「政治指導部」によつては、眞の止揚はありえないこと、それ自体スターリニ

ストたりうること、（革マルの逃亡）をみよ！あれこそスターリニストの典型的実体暴露である。」「政治指導」という思い上つた意識は実はそういう「指導者」たる個人をも、相手方の「被指導者」たる個人をも、おとしこめるフハイした関係、暴力的関係、相互の自傷行為であるということへ（これはK・T君に向けて強く特に云いたい）→疎外感としての政治

以上結論を云えば①きちんととした運動をやることをアドバイスする。②その過程でいろいろ意識上の変革もあり、家庭との問題も落ち付くだろう。（この問題については後で別に書く）

③まず責任をもつて、地味な仕事をむしろえらんでやるよう

ないと君の場合、他に突破口はないのではないか。フラフラした状態をやめること。

一進一退にドタバタするな。この闘争が僕のような者をもまき込んだ事を思え。僕ともう一步のところにいかに多くの（君たちにとつては）先輩がいるかを想像してみよ。やがて雪ダルマのように確実に多きくなつて行くのは瞭然である。このリアリティ。いま旧友たちに向けても別に書こうと思つている。君たち皆に向けてもしつかりしたものを見くべく用意している。なお本文は直接に加藤君とK・T君にあてたものだが、これを単なる私事として隠しておくのではなく、僕の部屋にでもおいて、他の諸君に見せてくれ、それが君のため。

怠惰といふこと

尾崎文昭

近頃、自分はやつぱり元来怠惰な人間なのだな、と思ひます。さあ勉強しようと張切つても長くつづきませんし、つい手軽な文学書の方へと気持ちが傾いて勉強は仲々はかどりません。警察署でも看守と和氣あいあいで少し、調べも大部分は同様でした。環境適応能力は大したものです。それに様々思い出してもみると、怠惰な性格を示すものはいくらでもあります。例えば大学に入つて一年ほどの間の“虚無”思想など恥しいほど安易でしたし、東大闘争中も政治屋的発想法をしたり。（政治屋でさえもないくせに）

で“外”から東大闘争を見ていて、やはり闘争の内部にかな

り怠惰な空気がまぎれ込んでいたるよう思えますから、ほくの東大闘争の中で学んだ八怠惰であつてはならぬことVについて少し書くのは皆さんの参考になるだらうと思います。

東大闘争の中で三つのこと、義理と人情と惰性ということを学びました。人情、義理、惰性の順に書こうと思います。

まず人情ということ、つまり人間が軽度され抑圧されている情況に対する怒りということです。この怒りを忘れてしまい、そのような状況に不感症になつてしまふ怠惰、ぼくたちはこれをおねねばかりません。又、感じ知つても、物事はこんなものだと物知り顔をしたり達観したりする思い上りの怠惰もいましめなければなりません。それは自己への、あるいは人間への不誠実です、軽蔑への共犯的行為だからです。どんな小さな事でも、それが人間を軽蔑し抑圧しているのならば、新鮮な驚きでもつてうけとり、誠実に怒つて本当だと思ひます。このようを緊張をつづけることはむつかしいことです。

つきの義理といふのは、現在の社会に住み生きる以上果さねばならぬ行為のことです。説明の必要もなく、現在の社会は政治によつて動いています。そして政治が質の問題を量で表現せざるをえないとすれば、更に自らその量の中に一兵卒として加わらねば、自らの思想と質の問題が表現され機能されないとすれば、ぼくたちは他ととりかえのきく一個人として行為しなければなりません。闘争の中の様々な行動、活動はその大部分があまり楽しくないではありません。例えば集会に参加して寒い風の吹きさらしの中で冷いコートに体をこごえさせ、

その上つまらぬアジテーションを聞く事でも集会に何名集つたかとことで政治的な意味を持つのであれば我慢してやはり座りつづけるでしよう。そうしなければ自分の思想も自己満足のお遊びになつてしまうのですから、アジビラのカツティングに一夜を費し、吐き気をおさえてピラマキすることだつて同じことです。大して寝ごこちのよくない所に幾晩も泊りこんだり、ほとんど食事もせずに走り廻つたり、同じことです。もちろんそのような行動の中で、自分への安心感信頼感のわずかな安定と解放されていると錯覚できる一時の快さを得ることはよくあります。そのような思想への自己への「義理立て」があつて始めて「民主的文化人」とか「進歩的文化人」とかいわれる人への激しい批判をする資格と権利を手に入れることができるのです。そのような思想への自己への「義理立て」の言葉にはありませんか。昨日石田講師夫人と会いましたが、夫君の言うに、自分は追求し批判されたいと思つてゐるのに少しもしてくれぬ、かえつて闘争を生半可にしてゐる奴がいいたいことをいふ、これをきくと腹が立つてしかたないと、これは本当のことだと思ひます。全共闘の運動が「民主的文化人」や「進歩的文化人」を作り出すのだとすれば、これほど自己序と偽善にみちた茶番はないでしよう。

最後に惰性について書きましよ。問題は惰性による思想や行動の硬直化です。どんな新鮮な革新的運動にも必ず惰性といへ判断停止の魔の手がのびてきます。冒頭でふれた八政治屋もその一つです。もう一つの方向は詠嘆です。前者は、出发は人間の解放を願つたにしろ現実の運動の中で、人をいかに操作するだけを考えるようになつたり、自分で問題の深化発展を考えず事務的手仕事に没頭したりする傾向のことです。こ

れは、偉大な闘争を支えているエネルギー源は一体何なのか、あるいは、それまでの日常的生活の重苦しさの正体は何だつたのか、についての思考をサボリ自己表現・問題の発展の努力をナボリます。そして、できあいの△理論▽と△分析▽で塗してしまいます。つまり闘争の発展に敵対するようになつてしまつたのです。

後者は、闘争のあるいは問題提起のカツコよさに醉つてしまつことです。例えばこの闘争の中で△自己否定▽という言葉が漫延したようですが、果してその内容は深化しているでしょうか。△自己否定▽という言葉に対しても△自己批判▽という言葉はあまり好まれません。それは敵に投げつけるための言葉のようです。しかし、そのような言葉の使い方は、あまりに怠惰です。あるいは偽善といつていいかもしません。というのも、△自己否定▽を一度使えば自分は全能の肯定者になつてしまつからです。最初の謙虚な気持ちを素直にのばそうとするなら、まず△自己批判▽を常に自分の身に向ける必要があります。人間の尊さへの誠実さといいう原点に照して常に自らの思想行動を自己批判し修正していくプロセスが絶対必要です。そうでなければ、他人へ△自己批判▽などと強要できるはずはありません。このプロセスの欠陥が、必ある人から指摘されているような全共闘のあるいは革新運動の惰落です。このプロセスが有効にはたらいて始めて△自己否定▽はその創造的意味と高いレヴエルを獲得するのです。

又、△自己否定▽を一庭となえると、何もかもそれですんだよううに感動してしまいます。この闘争ではその内容は△自己の内なる東大を△△△▽といいう形の自らが食人層に属することの確認が主なものです。それだけ念佛を上げても又大した意味はありません。せいぜい進歩的文化人を育てるか、進歩的ニヒ

リストを育てるだけです。自分の中に潜む特權者意識は生々しい形でつまり具体的な問題への反応の仕方の徹底的追求の形でする必要がありますし、さらにこの資本主義社会を支える論理△△△▽(それは大ていの場合ぼくたちの論理や倫理であるわけですが)の徹底的破壊を追求する必要があります。そのためには、怠惰にならず自分の生活や住む所の矛盾を徹底的に暴露しなければいけません。当面の問題の東大についてならば、その汚ならしい歴史の隅から隅まで探つて顕微鏡でしか見えないような矛盾まで全部白日の下に暴すことが必要でしよう。さらに人間のプロレタリアートの解放闘争に具体的に参加すること、つまり自らの疎外された人間の解放の闘争を創造し、プロレタリアートと固く團結することを執拗に追求する努力も決つして忘れてはなりません。

以上で、一応ぼくが△怠惰▽といいうことで感じている問題を触れ終りましたが、最後に少しばかりぼくの経験からの言葉を書きましよう。それはアナーキー的心情あるいはニヒリストイクな心情についてなのですが、ぼくの経験では自らの責任を放棄した寄生生活でしかありません。つまり自らの社会的そして政治的存在からの故意の逃避で、緊張(思想の生命)に疲れたり思ひます。そしてそれは大衆のエネルギーという怪物への恐怖と感動に支配されています。

皆さんも又、怠惰といいう妖女にさせられて命をおとさぬよう願つてやみません。

(四月十日)

お知らせ

獄中で斗う同志との公開文通の場として、
毎週一回発刊の予定です。今回掲載の手紙に
に対する感想・返事などがありましたら、真
崎宛にお送り下さい。

なお、獄中同志からの手紙をお持ちの方は
連絡して下さい。

第三版	四月二十日	印刷発行
発行者	「獄中書簡」	発刊委員会
委員長代行	加藤二郎	
△連絡先	文京区向丘1の12の7	
東大追分寮内	(811)二三六八	
真崎猛哲		